

氏 名 大原 重洋
 学位の種類 博士（リハビリテーション科学）
 学位記番号 博甲第 7813 号
 学位授与年月 平成 28 年 3 月 25 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 審査研究科 人間総合科学研究科
 学位論文題目 聴覚障害児におけるナラティブの発達とメタ認知的
 言語行動の形成に関する研究

主	査	筑波大学教授	医学博士	廣田 栄子
副	査	筑波大学教授	博士（障害科学）	吉野 眞理子
副	査	筑波大学教授	博士（人文科学）	安藤 智子
副	査	筑波大学教授	博士（教育学）	鄭 仁豪

論文の内容の要旨

（目的）

高度聴覚障害児では、音声言語学習に制約を有するものの、近年の早期診断と技術開発・早期介入により、幼児早期からの語の獲得等の課題を解消した例は少なくない。しかし、言語学的に上位となるナラティブ産生(テキストレベルでの会話表現機能)については、ミクロ的統語段階からマクロ的な内容統括段階への移行に個人差を示すものの、叙述部の連結からテキストの包括的整合に関する発達の機序と聴覚障害児固有の課題について研究資料は乏しく不明な点が少なくない。

そこで、本研究では、学童期の聴覚障害児におけるナラティブのマクロ的内容統括性の発達とミクロ的計量言語学的発達について解明し（研究 1）、典型発達児のナラティブ産生のメタ認知的言語行動の構成と発達に関する分析指標を解析し（研究 2, 3）、さらに、幼児が単独で構成するナラティブに先行して、複数の幼児で構成する協同的ナラティブとの関連性（研究 4）と、併せて基盤となる社会認知能力の関与（研究 5, 6）について横断的に検討した。これらの研究知見に基づいて、ナラティブ構成の指導の系列性について説明モデルを構築する（研究 7）ことを目的とした。

（対象と方法）

聴覚障害児 70 名（3～11 歳、平均 90.7±20dB）を対象とし、典型発達児 28 名（3～10 歳）を比較対照とした。ナラティブ産生資料については、聴覚障害学童に対して、ナラティブ課題の劇遊びを実験的に設定して採取し、マクロ的内容統括性発達（視点構成尺度、叙述統合尺度）とミクロ的

計量言語発達 (MLU 他) について横断的に検討し、ナラティブ産生の発達特性と課題を解析した (研究 1)。さらに、典型発達児のナラティブ課題の劇遊びによる言語資料からメタ認知的言語行動の構成要素を抽出し (研究 2)、ナラティブの内容統括性の因子構造を明らかにした (研究 3)。幼児期については、聴覚障害児と典型発達児の両方で構成する会話資料を採取して、協同的ナラティブにおけるメタ認知的言語行動の発達系列 (研究 4) と発達基盤 (研究 5) について解析した。併せて、心の理論 (Theory of Mind) 課題を用い、メタ認知発達に関する基盤形成とナラティブ言語産生との関連性を検討した (研究 6)。以上の実証資料を投入して共分散構造分析を用い、ナラティブの内容統括性を目的変数、メタ認知的言語行動の構成要素を説明変数として、ナラティブ産生の発達の機序を説明する因果構造モデルを構築した (研究 7)。

(結果)

1. 聴覚障害児のナラティブ産生における内容統括性は、8~9 歳児に比べ 10~11 歳児に発達のな向上を認めた。ナラティブの内容統括性については、「叙述統合の俯瞰性」が形成され、次に「視点構成の明確化」により叙述を論理的に整合する発達の系列性について明らかになり、併せてミクロ的計量言語学的な発達を伴うことが示された (研究 1)。
2. 典型発達児のナラティブ言語資料において、内容統括性について 7 種のメタ認知的言語行動の要素を抽出した (研究 2)。聴覚障害児のナラティブ産生では、7 種のうち、VI. 登場人物は 9 歳より、I. 結束、II. 俯瞰、V. 話法、VII. 行為の要素は 10 歳より使用頻度が増した。一方、III. 心的語、IV. 意識について、発達上の課題を示した (研究 3)。
3. 幼児期の協同的ナラティブについて、聴覚障害児では、VI. 登場人物と VII. 行為のメタ認知的言語行動の使用に止まり、典型発達児と比べて協同的ナラティブで既に遅滞が生じていた (研究 4)。併せて、幼児期のミクロ的計量言語発達において遅滞を呈し、協同的ナラティブ形成の阻害要因と示唆された (研究 5)。聴覚障害児は、心の理論課題の達成段階に比し、メタ認知的言語行動の形成に遅滞を認めた (研究 6)。
4. 聴覚障害学童におけるナラティブの内容統括性を構成するメタ認知的言語行動については、4 因子構造 (行為の景観、意識の景観、事象の二重性、言語の二重性) を示し、前 2 因子の使用の高次化により、「二重の景観」が形成されることが示された。聴覚障害児のナラティブにおける内容統括性の発達については、「事象の二重性」における 3 要素 (I. 結束、II. 俯瞰、V. 話法) を輻輳的に構成する系列性を認めた。一方で「行為の景観」の輻輳的な構成を認めるものの、「意識の景観」の高次化に課題を呈することを共分散構造分析により統計学的に示した (研究 7)。

(考察)

本研究では、ナラティブ産生課題を用いて、幼児期から学童期の聴覚障害児において、ナラティブの内容統括性の発達を解析し、各時期のナラティブに共通するメタ認知的言語行動の構成要素が順次、追加され、高度に使用される過程であることを明らかにした。

内容統括性は、叙述統合が先行し、視点構成が形成され、両視点獲得によって高次化を認め、その際に、メタ認知的言語行動は、「行為の景観」と「意識の景観」の 2 因子の高度化により、「二重の景観」が形成され、3 要素 (I. 結束、II. 俯瞰、V. 話法) が輻輳的に構成されることで、内容統

括性の発達が生じた。学童期におけるマクロ的内容統括性の高次化には、併せてミクロ的計量言語発達の向上を認め、両者は相互補完的に高度化したと考察した。

幼児期から学童期のナラティブ発達において、メタ認知的言語行動は連続的に構成され、典型発達児では幼児期に構成要素が揃うのに対して、聴障児では遅滞し、幼児期からの一貫した指導の重要性が示唆された。以上の実証的研究に基づき、ナラティブ産生の因果構造モデルを構築し、内容統括性の要素として、メタ認知的言語行動の構成を明らかにし、ナラティブとその前段階の発達機序を念頭においた、言語指導の有用性について理論的根拠を示したと結論付けた。

審査の結果の要旨

(批評)

高度聴覚障害児では聴覚情報の制約により、幼児期の言語獲得に遅滞を示し、早期からの系統的な言語リハビリテーション方法の解明が喫緊の課題とされている。とくに、聴覚障害児学童期のナラティブ産生の遅滞については、国内外で研究課題とされているものの学際的指標を関連付けた指導理論の開発は十分とはいえない。本研究では、言語学的視点と認知言語発達学的視点の両側面から、ナラティブ産生における統括性能力の構成と順序性について明らかにし、療育・教育における指導の論理策定に有用な結論に至ったことは高く評価できる。

さらに、学童期ナラティブ産生と、幼児期の協同的ナラティブ形成とを関連付けて、幼児期から学童期の言語指導の連続性に関して科学的な根拠を示したことは、今後の言語臨床の発展に関わる示唆に富む知見と示唆された。

平成28年1月23日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（リハビリテーション科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。